☆年間第25主日(9月24日)の聖書朗読☆※主任司祭からの解説があります。

第一朗読　（イザヤの預言 55 章 6-9 節）

主を尋ね求めよ、見いだしうるときに。
呼び求めよ、近くにいますうちに。
神に逆らう者はその道を離れ
悪を行う者はそのたくらみを捨てよ。
主に立ち帰るならば、主は憐れんでくださる。
わたしたちの神に立ち帰るならば豊かに赦してくださる。
わたしの思いは、あなたたちの思いと異なり
わたしの道はあなたたちの道と異なると主は言われる。
天が地を高く超えているようにわたしの道は、あなたたちの道を
わたしの思いはあなたたちの思いを、高く超えている。

第二朗読（使徒パウロのフィリピの教会への手紙 1 章 20-24,27 節）

　皆さん、生きるにも死ぬにも、わたしの身によってキリストが公然と
あがめられるようにと切に願い、希望しています。
わたしにとって、生きるとはキリストであり、死ぬことは利益なのです。
けれども、肉において生き続ければ、実り多い働きができ、どちらを選ぶ
べきか、わたしには分かりません。
　この二つのことの間で、板挟みの状態です。一方では、この世を去って、
キリストと共にいたいと熱望しており、この方がはるかに望ましい。
だが他方では、肉にとどまる方が、あなたがたのためにもっと必要です。
ひたすらキリストの福音にふさわしい生活を送りなさい。

福音朗読　（マタイよる福音書　20 章 1-16 節）

「天の国は次のようにたとえられる。ある家の主人が、ぶどう園で働く労働者を雇うために、夜明けに出かけて行った。主人は、一日につき一デナリオンの約束で、労働者をぶどう園に送った。また、九時ごろ行ってみると、何もしないで広場に立っている人々がいたので、『あなたたちもぶどう園に行きなさい。ふさわしい賃金を払ってやろう』と言った。それで、その人たちは出かけて行った。

主人は、十二時ごろと三時ごろにまた出て行き、同じようにした。五時ごろにも行ってみると、ほかの人々が立っていたので、『なぜ、何もしないで一日中ここに立っているのか』と尋ねると、彼らは、『だれも雇ってくれないのです』と言った。主人は彼らに、『あなたたちもぶどう園に行きなさい』と言った。

夕方になって、ぶどう園の主人は監督に、『労働者たちを呼んで、最後に来た者から始めて、最初に来た者まで順に賃金を払ってやりなさい』と言った。そこで、五時ごろに雇われた人たちが来て、一デナリオンずつ受け取った。最初に雇われた人たちが来て、もっと多くもらえるだろうと思っていた。しかし、彼らも一デナリオンずつであった。

それで、受け取ると、主人に不平を言った。『最後に来たこの連中は、一時間しか働きませんでした。まる一日、暑い中を辛抱して働いたわたしたちと、この連中とを同じ扱いにするとは。』主人はその一人に答えた。『友よ、あなたに不当なことはしていない。あなたはわたしと一デナリオンの約束をしたではないか。自分の分を受け取って帰りなさい。わたしはこの最後の者にも、あなたと同じように支払ってやりたいのだ。自分のものを自分のしたいようにしては、いけないか。それとも、わたしの気前のよさをねたむのか。』このように、後にいる者が先になり、先にいる者が後になる。」

朗読解説　―主任司祭より皆様へ―

今日は世界難民移住移動者のための献金が求められています。申命記には「寄留者を保護しもてなす」ように律法に定められていました。それは昔イスラエルの民はエジプトで移住者・難民だったからです。新約の時代にお

いては救い主自らが幼い頃ヘロデ王の迫害を避けてエジプトに逃れておられたからです。現在世界中には政治的圧迫、飢餓、戦争による難民が増えています。そんな中で日本の国は改正入管法によって故国に強制送還する危険　な法律を決めました。まさに神の掟に反する不法行為を行おうとしています。現実には私たちの周りにはたくさんの外国人、寄留者がいます。私たちは少なくとの現実生活の場面で「難民・移住移動者たちのために寛大な支援を行うようにしましょう。

第一朗読　（イザヤの預言 55 章 6-9 節）

イスラエルの民のバビロン捕囚時代のイザヤの声です。捕囚とは神に逆らい続けたイスラエルの民が外国勢力に屈して自分たちの土地から外国に連れ去られたことを言っていますが、主なる神の側からすれば、決して見捨てているわけではなく、神に立ち返ることを求めているものと言えるでしょう。「神に逆らう道を離れよ。主に立ち帰れ。」と。立ち返ることはもう一度主に信頼を置くことを意味しています。主なる神は決して私たちを見捨てる方ではなく、私たちの思いとは異なりどんな状態からでも立ち返ることを望んでおられるのです。

第二朗読（使徒パウロのフィリピの教会への手紙 1 章 20-24,27 節）

パウロはローマでの獄中にあって、考え方がよりストレートな表現になっています。キリストとともに生きるために今すぐにでも死を迎えたいと。しかし、それを思いとどまらせるのは生きてより多くの人をキリストに導きたいと思いだと述べています。そのジレンマに生きていると言っているのです。パウロらしい表現だと思います。人生な悩むならこう悩みたいものですね。

福音朗読　（マタイよる福音書 20 章 1-16 節）

今日の福音は人の思いと神の思いは異なるということではないでしょうか。また当時の律法主義にくぎを刺すイエスの宣教方法だと思います。最初に雇われた労働者は何もしないで広場に立っていたのです。そして一日

一デナリオンで契約したのです。最後の人も何もしないで広場にいて仕事を与えられ、一日一デナリオンで契約したのです。最初の人はもっと多くもらえると勘違いしたのです。なになにしたからもらえる、という発想はまさに律法主義の考え方です。恵みは神から来るのです、そしてそれは無償だということを忘れてはならないのです。無償で与えられているにもかかわらず、与えられて当然というファリザイ的な考えは通用しないのです。私たちも気をつけなければならないところですね。こんなに祈ったから恵みをくださるだろう、くださらなければならないと思ってしまうことに注意しなければならないのです。聖霊はどこを吹く風でしょうか。私たちにはわかりません。それと同じように神の恵みはどこに吹くかわからないのです。その順番は神のなさること、そしてそれは私たちの最高の状態を与えてくださるということです。

秋を迎える尾瀬の湿原(2023 年)

P.S.

　難民移住移動者のことを考えると、私たちの生活は何と贅沢なことか。安住しているのです。住まうところも仕事をするところも安定しているのです。安定になれると私たちはだんだん腐っていきます。よどむ水のようです。

カトリック足立教会
主任司祭　野口重光